



発行 社会福祉法人 聖友ホーム
 聖友乳児院（乳児院）
 聖友学園（児童養護施設）

聖友ホーム応援団 聖友ホーム ささえ隊 会員募集中！

「ささえ隊」について詳しくはHPまたはチラシをご覧ください



「新たな100年に向けての施設整備」

—— 合築事業に向けての展望と報告 その①

聖友ホームは、1923年9月の関東大震災で困窮した妊産婦や乳幼児を救済するために、産婆・看護師であった創設者床次桂子（とこなみけいこ）が、同年11月に、産院を創設し同時に婦人の身の上相談を開始したのが始まりです。戦後の1947年に児童福祉法が制定され、戦災孤児などを保護するため、多くの乳児院や児童養護施設が設置されましたが、聖友ホームはその20年以上も前から乳幼児を守る活動を続けてきた古い歴史のある法人です。創設98年を迎えました。

歴史のある聖友ホームですが、その分建物は古く、聖友乳児院の建物は築47年、聖友学園の建物は築34年となっています。建物の老朽化は避けられず、また、施設に現在求められている新たな機能に対応するにもハード面での限界があり、両施設の建替えが聖友ホームの念願となっていました。

聖友ホームでは職員が話し合いを重ね、他施設を見学するなどしてきました。そして、2020年3月に設計会社を選択するプロポーザルを実施し、選ばれた設計会社と契約し、その後設計会社と聖友ホームの職員で10回のワークショップを実施し、基本設計がもうすぐ完了するところまでできました。



昭和62年新築当時の聖友学園



※完成イメージ図

ました。「切れ目のない支援」を聖友ホームの目標として掲げてきましたが、両施設を合築することで、より一層施設間の連携が深まることが期待されます。また、国の示している新しい社会的養育ビジョンの方針にも沿って、「小規模化」、「里親支援」、「一時保護機能強化」、「地域の子育て支援」等々、時代の要請を受け止められる施設となるよう計画を進めています。

今後は、建物の詳細な設計をする実施設計の段階へと進みます。2022年の秋には建設会社を選定する入札を行い、工事着工へと進みます。乳児院の乳幼児を建築工事中に別の場所に一時的に引っ越しさせるのは困難なため、建設は2期に分けておこないます。先ず、学園の建物だけを解体し、その跡地に乳児院と学園がまとめて入る2施設統合の建物を建築します。2023年12月の完成を予定しています。その間、現在の聖友学園にいる子どもたちには新たに借りるグループホーム(GH)に引っ越ししてもらいます。次に、現在の聖友乳児院の建物を解体し、その跡地に多機能化に対応できる部屋や地域への貸し出し等多目的に利用できるホールなどが入った建物を建築します。2025年1月の完成を予定しています。

この施設整備事業をしている間に、聖友ホームは創設100周年を迎えます。新たな100年に向けて、新しい建物が子どもたちの暮らしと職員の仕事の質を格段に高めてくれることと思います。この施設整備事業に対し、皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

職員紹介

20年度
入職職員

『1年間働いて見える
施設の良い面と課題』

聖友学園 保育士 川崎真哉

聖友学園にGHフリー職員として入職して一年が経ち、今では徐々に子どもからも信頼され始めました。仕事を始めた頃は子ども一人ひとりの性格やこだわりが全く分からず、気難しい性格やこだわりが強い子どもの対応に悩んでいました。ですが、一人で何事も対応するのではなく、一つのチームとして対応するのが聖友学園であり、ホーム職員の方に様々な場面において、アドバイスや手助けをしてもらいました。



また、子ども一人ひとりにも手厚い支援をしており、様々な視野で専門的に見るため専門職と連携して関わるなど、本当に子どものことを深く考えている施設だと思えます。一方で、子どもに本気で向き合えば向き合うほど疲弊していくこともあり、ストレスが解消されずに、積み重なることもあったと感じました。対人仕事のためストレスが溜まりやすく、退職する人も少なくないと思いますが、ストレスを可能な限り溜め込まずに、これからも聖友学園の職員として、子どもと向き合いたいと思います。

『学習支援へ心強く優しく』

聖友学園 保育士 米野芽依

私が聖友学園で働かせていただいている中で、日々感じていることは、子どもへの学習支援についてと職員の皆さんの優しさです。

一つ目の学習支援について印象的だったことは、子どもの読み書き検査を行い、どのような課題があり、改善していくにはどのような取り組みが良いのかを検討し、実践していく取り組みです。その子に合った取り組みを続けることで成長を感じられ、子ども自身も学校の授業を聞くことが、少しでも楽になるのだらうと思いました。他にも公文学習を取り入れたりしており、学習を支援する環境が良いなと思っています。

二つ目は職員の皆さんの優しさです。一年目は様々な面でわからない事が多く、探り探りの日々でしたが、質問したことに対して、忙しい中でも丁寧に答えてくださったり、ホームとは直接関わりのない職員の方からも労いの言葉をもらったりと、一職員にも関わらず見守られている安心感、心強さがありました。

一年間担当したホームや他ホームの子どもの話を聞く中で、もっと様々な専門知識のある方や、実際に課題のある子どもの対応をされ



委員会紹介スペシャル(合同委員会)

地域交流委員会

広げていきたい、
地域との繋がり

地域交流委員会では、毎年地域の方に向けた講座や広場を開催しています。年度によって、開催頻度は異なりますが、これまでも「リトミック教室」「ママ撮り写真館」「ベビーマッサージ」「手形アート」「言葉の発達に関する講義」「乳幼児の病気に関する講座」等、たくさんのイベントを行ってきました。少しずつ「聖友子育てひろば」として地域の方々に馴染んできたと感じています。

しかし、昨年度は新型コロナウイルスという、今までにない感染症の流行に伴い、人を集めての催しは断念せざるを得ない状況に…。「でも地域の方との繋がりは続けたい!」と、地域交流委員会として、乳児院・児童養護施設で知恵を振り絞りました。

壁面制作を
テーマに

「壁面製作を地域の方々と一緒にやれたら楽しいのでは?」というアイディアをもとに、クリスマスの時期に合わせて、乳児院の壁面掲示板を使い『壁面製作』を計画しました。お星さまに好きなように絵を描いてもらったり、色を塗ってもらったり、デコレー



ションしてもらったりし、最後はラミネートして掲示するという企画です。近隣でお世話になっている3施設(世尊院幼稚園、杉九小放課後等居場所事業、阿佐谷児童館)に制作の協力を依頼したところ、快く引き受けてくださいました。

最初は50枚程度集まればいいかな?と思っていたところ、地域の方々、子どもたちのたくさんの協力の下、なんと200枚以上のお星さまが集まりました。各施設からも好評いただき、無事クリスマスの時期に合わせて掲示することができました。

コロナ禍の中で

新型コロナウイルスの影響で、どのご家庭でも外出を控え、我慢を強い、地域との繋がりと疎遠になる不安を感じながらの生活が続いています。施設の子どもたちも、満足に外出できず、職員はマスク姿で子どもたちとコミュニケーションを続けることに

不安を感じています。そのような中、今回の企画で新しい形で地域の方々と繋がれたことは、私たちの施設にとっても新たな発見で、喜びでもありました。

今年度は、新型コロナウイルス対策

を行いながら「子育てひろば」を開催出来たら良いと考えています。壁面製作においても、引き続き実施する予定です。これからも、たくさんの工夫、アイディアを出しあいながら、地域とのつながりを大切にしていきたいと思っています。(杉井麻彩)

ている方のお話が聞ける場があると、聖友学園の中でも、より良い支援に繋がるだろうと思います。

『一人でなく、チームとして』

聖友乳児院 保育士 嘉久和智代



入職して1年が経ち、業務もスムーズに行えるようになり、徐々に子どもとの信頼関係を築いてきた中で、改めて1年を振り返ると、沢山の学びがありました。

入職した頃は、業務内容を必死に覚えながら子どもとの関わりに悩むことが多く、思い詰めてしまった時もありました。悩んだ時、先輩職員の方々が親身になって話を聞いて下さり、アドバイスをして頂いたお陰で、子ども一人ひとりの特徴に合わせて関わる事が出来るようになってきました。

その中で、日々成長する子どもの特徴や関わり方を更に知る為には、職員同士の情報共有や専門職との連携が大切だと学びました。保育士だけでなく専門職と連携し、子どもにとって何が最善の利益になるのかを一個人ではなく乳児院というチームで追及することや、協力し支援を行えることが、この仕事の魅力だと感じます。

聖友乳児院の一員として、これからも子どもに寄り添いながら、日々の成長を感じていきたいです。

『子育てしながらの仕事』

聖友乳児院 保育士 稲葉 優

朝、保育園に送り出そうとする時「今日はこの靴じゃない!この上着は嫌!」と直前に言い出す娘。バタバタしながら出勤し、終わるとお迎えに行き、お風呂に入れご飯を作り「これ食べない!」と言っている娘と戦い、歯磨きし寝かせるまでいつもドタバタです。



家だつとい怒りすぎ、夜寝ている娘の寝顔を見ながら反省する日々ですが、この仕事をしていると、先輩職員の子どもたちへの対応を見ながら「こういう風に伝えたら良かったな」と学ばせて頂く事が沢山あります。子どもたちも「これ面白いよ!」と色々教えてくれるので、教えてもらった遊びや本を家で娘に教え遊んだりしています。「ママのお仕事場の子はどんな子なの?遊びに行きたい!」と娘はいつも興味津々です。

院には娘と歳が近い子が多いので「こういう時期があったな、この時期はこうして欲しいよね」と思いながらその子に向き合います。

この間までハイハイだった子が歩き出した日や、今まで玩具を譲れなく喧嘩になっていた子が「どーぞ」と貸している姿を見た日など成長を間近で感じる度、嬉しく、この仕事に日々やりがいを感じています。

コロナ禍での乳児院の生活

「聖友神社」 にお参り



毎年、お正月には近くの神明宮神社へ行き、職員と一緒に「今年も元気に過せますように…」と、願いを込めてお参りへ行っていました。

このコロナ禍の中で子どもたちの生活もだいぶ制限をかけながら毎日を過ごしています。出掛ける事が難しい中、子どもたちが楽しく過ごせる企画はないかと、養育委員会のメンバーで話し合いを重ねてきました。すると、メンバーの中で「以前、働いていた職場で鳥居を作った事がある！」との話があり、「お参りに行けないなら乳児院に神社を作ろう」との話しでまとまりました。手分けをして神社に必要な鳥居を始め、門松、お賽銭箱、おみくじ、巫女&神主の衣装、子どもたちには事前に絵馬を書いてもらいました。鳥居の製作はかなり大きく、バランスを保つのが難しかったですが、“聖友神社初詣”には欠かす事のできない素晴らしい出来栄となりました。

両クラスに分かれての開催。大きな鳥居の前にはお賽銭箱があり、お金を入れて参拝。職員が扮した巫女さんにおみくじと甘酒ならぬカルピスを注いでもらい、神主に変身した院長先生より1人ずつご祈祷をしてもらいました。ちょっぴり緊張していた子どもたちの表情がまたとても可愛らしかったです。

コロナだから何処にも行けない…出来ない…ではなく、コロナでも子どもたちが楽しめるよう考える事の大事さを学べた企画だったと思います。何時、コロナが終息するか先は見えませんが、子どもたちの笑顔が今よりももっとたくさん見られるよう、今までの日常生活が送れる事を職員一同で願うばかりです。

(高橋 好美)

コロナ禍での学園の生活

スタート

コロナ関連ニュースを盛り込んだ、 オリジナルすごろくを作成

けやきホーム（女児GH）では、ステイホーム中の余暇時間、折り紙製作やパーティーゲームが流行しました。みんなで動画を見ながら作った鬼滅の刃や、すみっこぐらしのキャラクター、季節の折り紙は、今もホームの壁面を素敵に飾ってくれています。

パーティーゲームは『ナンジャモンジャ』、『おぼけキャッチ』、身体を使った『ツイスター』、しりとりゲームの『ワードバスケット』。演技力が問われる『はあって言うゲーム』、推理戦の『ワードウルフ』、『人狼ゲーム』etc。子どもも大人も大いに盛り上がりました。

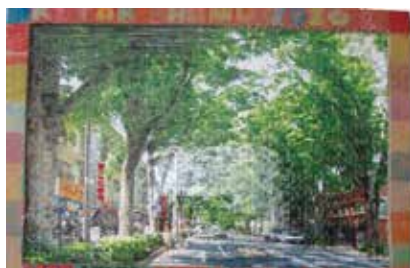
それでも続いた自粛生活。手持ちのゲームに飽きると、『人生ゲーム』や施設在勤の看護師が作成した『感染症すごろく』からヒントを得て、『オリジナルすごろく』を作成しました。みんなで意見を出し合っ

て、お金の貰えるポジティブなイベント、ネガティブなイベントを考えながら作り進めます。

「新型コロナウイルスに感染で1回休み」や、「補助金を受け取る」なんてマスも登場する、この時期ならではの作品が完成しました。

また、ホーム名の由来となった阿佐ヶ谷中杉通り沿いのけやき並木を、315ピースのジグソーパズルにして、全員で『けやきパズル』を完成させたのも、良い思い出です。（中村朝美）

YouTube
にみた
5分



コロナで
お金の貰える
イベント

スタートに
戻ろ??

